

研究

RESEARCH

自己効力を高め生涯学習へ 導く学校音楽のあり方

東京都足立区立千寿小学校 音楽専科教諭

杉浦 あずさ

はじめに

生涯学習社会をめざす今日、学校教育において、「生涯学習の基盤」としての教育が求められている。音楽科教育も同様であり、学習指導要領には、生涯学習を見据えて「生涯にわたって音楽を愛好する心情」を育てることが、教科の目標として記載されている。

しかし、義務教育課程中の音楽科教育の授業時数は、最も多かった時期の4分の3以下まで減少している。また、全授業時数に対する音楽科の授業時数の割合も減少している。これには、いわゆる主

要教科の授業時数の影響によるものが大きい。今日の社会における音楽科教育の意義を改めて問い直す必要があるだろう。

ところで、カナダの心理学者 Bandura, A. (1977) は、『社会的学習理論』の中で、自己効力（ある結果を生ずるのに必要な行動を行うことができる、という確信）という概念を提唱した。生涯音楽学習への参加決定場面に援用すると、これから始める音楽学習から期待できる結果を得るために必要とされる行動を、「自分ならできると思う確信が、自己効力である」という確信を高く見積もる。

ことができれば、生涯学習へ参加することはより容易になる。

そこで、生涯音楽学習への参加を決定する時に見積もる自己効力と音楽科教育との関係を考察し、音楽科教育の意義を再考するために、本研究に至った。なお、本研究の対象は、より広い視野から音楽科教育を考察するために、学校で行われる音楽活動である音楽科教育・音楽系部活動・音楽的行事を「学校音楽」とし、これと自己効力との関係を考察する。

1 生涯学習としての音楽活動の意義

ここでは、生涯学習としての音楽活動の意義を、音楽活動がもつ二つの機能から考察する。

①「余暇」の機能

第一の意義として、「余暇」の機能が挙げられる。生涯学習という言葉の源流である生涯教育の社会的意義の一つに、Lengrand, P. (1970) は、「余暇の増大」を挙げている。また、Dunzadiedier, J.

(1962)は余暇の機能として、休息、気晴らし、自己開発の三点を挙げており、杉江淑子(2004)も、その三点が音楽活動に密接に関わりをもっている指摘している。

②「コミュニケーション形成」の機能

第二の意義として、「コミュニケーション形成」の機能が挙げられる。今日、地域共同体の崩壊や地方の疲弊が問題となっているが、香川正弘(2009)は、生涯学習はまちづくりに貢献していると述べている。さらに、高萩保治(2000)も「音楽のまちづくり」が急増していることを示しており、音楽は「コミュニケーション形成」の機能をもっていることが示唆される。

以上、音楽活動がもつ二つの機能から、生涯学習として音楽活動は意義があるものと考えられる。

2 自己効力とは

ここでは、Banduraが提唱した自己効力を、生涯音楽学習へ参加を決定する際に適用できるかどうか

かを検討していく。

①予期機能

人は自らの行動に至る前に2種類
の予期をする。1つは結果予期
といい、「ある行動がある結果に
導くだろう」という個人の推測」と
定義されている。そしてもう1つ
が効力予期といい、「その結果を
生ずるのに必要な行動をうまく行
うことができる」という確信」と
いう意味である。後者を概念化し
たものが自己効力である。

②自己効力の情報源

自己効力は自然発生的に生じる
ものではなく、5つの情報源をと
おして、個人が自らつくり出して
いくものである。以下はその情報
源の特徴と生涯音楽学習への参加
決定時に自己効力を高めると思わ
れる例である。

(1) 遂行行動の達成 自分で行動

して必要な行動を達成できた
という経験。最も強力で安定した
情報源。(例…練習してある曲
を演奏できるようになった。)

(2) 代理的経験 観察した他者の

行為。(例…友だちがある曲を
演奏できるようにになった。)

(3) 言語的説得 自己教示や他者

からの説得的な暗示。(例…あ
なたならできるよと言われた。)

(4) 情動的喚起 生理的な反応・

気分の変化の体験。(例…ある
曲を演奏すると気分が高揚し楽
しい気持ちになる。)

(5) 状況的環境 おかれた状況の

制御のしやすさの体験。(例…
和気藹々としている雰囲気の中
だと歌いやすい。)

③自己効力の水準

自己効力は2つの水準で、人間
の行動に影響を及ぼすと考えられ
ている。1つは、ある場面で遂行
される特定の行動に影響を及ぼす
課題特異的なものである。生涯音
楽学習への参加を決定する場面に
置き換えると、演奏や活動環境に
関する自己効力など、「生涯音楽
学習に参加する」という特定の行
動に関係するものがそれにあた
る。もう1つが、個人の一般的な
行動傾向に関係するものである。

こちらは、個人のすべての行動に
通ずるものであるため、生涯音楽
学習への参加を決定する場面にお
いても考慮すべき水準といえるだ
ろう。

3 大学生へのインタビュー

以上を踏まえ、音楽系サークル
に所属する大学生を生涯音楽学習
を行っている者とみなし、音楽系
サークルへの入会を決めた時の自
己効力の働きを明らかにするため
にインタビュー調査を実施した。

①インタビューの概要

・調査協力者 10種類のサークル
(オーケストラ、吹奏楽、アカ
ペラ、ジャズ、和太鼓、邦楽、
クラシックギター、フォークソ
ング、軽音楽①②)に2年以上
所属する19名を対象に実施し
た。

・実施時期 本調査は2014年
9月中旬から10月上旬に19名に
対して行い、追調査は2014
年12月中旬から2015年1月
下旬にかけて2名に対して行っ

た。
・手続き インタビューは半構造
化面接で行われた。本調査の平
均所要時間は1時間10分であっ
た。

教示は「サークル入会時、サ
ークル活動においてうまくやっ
ていけるだろう、という自信は
どのくらいありましたか? 1
00点を最も自信がある状態と
して、得点をお答えください。
また、その得点をつけた根拠を
教えてください」であった。こ
の時の「サークルでうまくやっ
ていけるだろう、という自信」
を本研究では「音楽系サークル
自己効力 (Musical Circle Self-
Efficacy, 以下MCSE)」と名付
け、その高さを100点満点で
表したものをMCSE得点とし
た。

その他、音楽歴 (個人票を基
にしたインタビュー)・入会動
機とその高さ (5種類の動機か
ら選択し7段階で評定)・入会
時のモチベーションの高さ (1

00点満点」と得点の根拠・入会時の音楽的スキルへの意識（サークルに必要な音楽的スキルを8種類から選択し、そのスキルへの意識を5段階で選択）などについて質問した。また、坂野雄二・東條光彦（1986）による一般性セルフ・エフィカシー（自己効力の水準の一般的なもの）を測定するスケール、GSESの質問紙調査も実施した。

②結果 MCSE得点の傾向

最高値は100点、最低値は10点であった。また、平均値は59・250点であり、標準偏差は27・444であった。

GSES得点の傾向

GSES得点の満点は16点である。最高値は16点、最低値は4点であった。また、平均値は8・350点であり、標準偏差は3・525であった。

ピアソンの積率相関係数の算出

MCSE得点とGSES得点との相

関は、 $r=0.473$ であった。従って、MCSEは一般性セルフ・エフィカシーの影響を中程度受けているということが出来る。

入会決定時のサークル活動へのモチベーションの高さとMCSE得点との相関は、 $r=0.792$ であった。従って、サークル入会時に見積もったMCSEは入会決定時のサークル活動へのモチベーションの高さに強い影響を及ぼしているといえる。

質的分析

質的分析は、調査協力者から得られたMCSEの情報源を活動側面から分類して行った。MCSEの情報源とは、MCSE得点をつけた根拠にあたるものであるが、インタビュー結果から、音楽・人付き合い・スケジュール管理・金銭管理・サークル活動全体の5つの側面に分類できた。

以下は、その中の特に音楽面に関するMCSEに着目したうえで、Banduraが示した5つの情報源の視点をを用いて行った分析・考察の

結果である。

(1)音楽面に関するMCSEに影響を及ぼす成功体験

Banduraが示した5つの情報源のうちの遂行行動の達成によって音楽面に関するMCSEを高めた調査協力者の経験は、音楽系部活動や習い事が多かった。その経験の特徴としては、①音楽的スキルを身に付けることができた経験 ②音楽的スキルや活動を褒めてもらえた経験 ③音楽の活動過程に価値を見出せた経験 ④音楽に関する経験への特別意識を見出せた経験、であった。その一方で、音楽の授業や音楽的行事での経験を成功体験として捉えた回答はなく、失敗体験と捉えてしまう回答もあった。

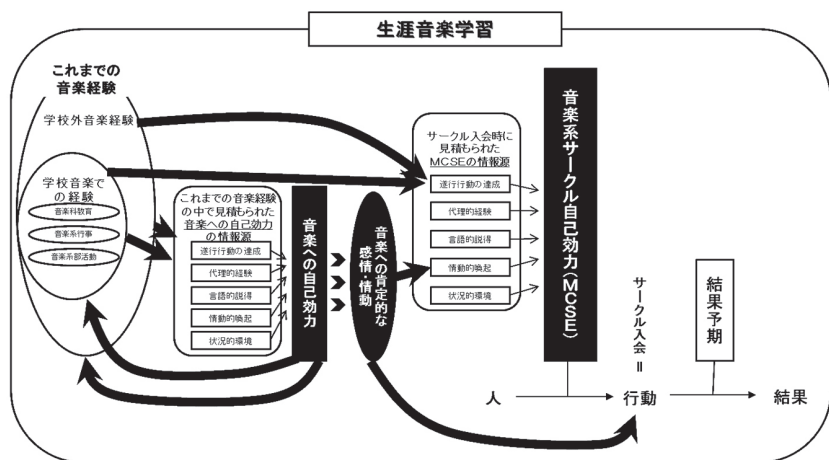
(2)音楽科教育が育む音楽への肯定的な感情・情動

本調査協力者は、音楽科教育や音楽的行事での経験を成功体験として捉えてはいなかったが、これらの経験によって、音楽への肯定的な感情・情動が育まれ、MCSE

が高められた事例が認められた。これはBanduraが示した情動的喚起を情報源としている。これらの事例は、音楽活動の中で、音楽自体への自己効力を高めていく過程を積み重ねた結果、音楽への肯定的な感情・情動が育まれたと考えられる。¹⁰音楽自体への自己効力を高めた活動の特徴は、①他者と音楽を奏でられる喜びを感じられた活動 ②特別な役割を与えられたと感じられた活動 ③好きな曲を演奏できた活動 ④音楽を奏する雰囲気の良いを感じられた活動、であった。

また、音楽への肯定的な感情・情動は、MCSEを直接高めるわけではないが、その感情・情動に基づき、「サークル入会」という行動に至っている事例も認めることができた。

以上で述べた、学校音楽が音楽系サークルに所属する学習者の入会時の自己効力を高め、音楽系サークル入会へ導く過程を示したものが次頁の図である。



▲大学生の音楽系サークル入会へ導く自己効力と学校音楽の関係
 ※ Bandura (1977) の効力予期と結果予期の関係図を基に作成。図中のことは全て個人の中で起きている。

にあたる成功体験として機能する経験は、音楽系部活動や学校外音楽経験である習い事での経験が大きく占めることがわかった。一方、音楽科教育や音楽的行事はこのような経験としては捉えられづらいことが示された。

しかし、音楽科教育や音楽的行事は生涯音楽学習に影響を及ぼしていない訳ではなく、これらは、音楽への肯定的な感情・情動を育てていた。学習者は、これらの肯定的な感情・

情動に基づいて生涯音楽学習への参加を決定する時に必要とされる自己効力を高めていたのである。音楽系部活動や学校外音楽経験で養いやすい音楽的スキルを身に

付けることは、生涯音楽学習への参加決定時に自己効力を高める大切な要素である。音楽科教育や音楽的行事の中では、そのための基本的な素地を養うことが必要であるだろう。

そのために、限られた時間の中で、より多く生涯音楽学習に導くことができるよう、音楽に対して肯定的な感情を呼び起こすような活動を精選し実践していくことが求められるだろう。

4 結論

本研究において、音楽系サークル入会時に働く自己効力(MCSE)の情報源のうち、遂行行動の達成

情動に基づいて生涯音楽学習への参加を決定する時に必要とされる自己効力を高めていたのである。音楽系部活動や学校外音楽経験で養いやすい音楽的スキルを身に

(註)

- 1 小中学校の音楽の授業時数が最も多かった昭和43年度と現在との比較。中学校第2・3学年は半分にまで減っている。
- 2 Bandura, A. (1977) Social learning theory. Prentice Hall / (邦訳) 原野広太郎 監訳 (1979) 『社会的学習理論—人間理解と教育の基礎—』金子書房
- 3 Lengrand, P. (1970) Introduction à l'éducation permanente. UNESCO / (邦訳) 波多野完治 (1971) 『生涯教育入門』(財)全日本社会教育連合会
- 4 Dumazedier, J. (1962) Vers une civilization du loisir? Olivier Burchelin / (邦訳) 中島巖 (1992) 『余暇文明に向かつて』東京創元社
- 5 杉江淑子 (2004) 『余暇と音楽』『日本音楽教育辞典』音楽之友社、pp. 794-797
- 6 香川正弘 (2008) 『生涯学習とは何か 1 生涯学習の定義』香川正弘 他編『よくわかる生涯学習』ミネルヴァ書房、pp. 2-5
- 7 高萩保治 (2000) 『I 生涯音楽学習の基礎理論 6章 地域社会における音楽活動とその事例』高萩保治・中嶋恒雄 編『音楽の生涯学習—理論と実践』玉川大学出版部、pp. 113-160
- 8 杉浦あずさ (2015) 『自己効力を高める生涯学習へと導く学校音楽のあり方—音楽系サークルに所属する大学生へのインタビューから—』東京学芸大学大学院修士論文
- 9 坂野雄二・東條光彦 (1986) 『一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み』『行動療法研究』12 (1)、pp. 73-82
- 10 Bandura, A. / (邦訳) 重久剛 (1985) 『第II部3自己効力(セルフ・エフィカシー)の探求』祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊 編『社会的学習理論の新展開』金子書房、pp. 115-119。『自己効力の開発によって、内発的な興味を育てること』の記述から考察した。